

《資料》

満州鉄鋼業開発の実態について

——元昭和製鋼所企画課長水津利輔氏に聞く——

松 本 俊 郎

はじめに

水津利輔氏は、創立当初の満鉄鞍山製鉄所に勤めてから1963年に日本鉄鋼連盟常務理事を退職されるまで、実に50年に近い鉄鋼人生を歩んだ人である。そして、筆者が現在関心を持っている旧「満州国」時代の満州産業開発については、鉄鋼増産計画の企画、立案、実施の全てにわたって、最も良くそれを知り得る立場にあった。水津氏は「満州」最大の鉄鋼企業、昭和製鋼所（満鉄鞍山製鉄所）の企画課長、あるいは本国鉄鋼統制会の企画部長として、「満州国」のみならず「円ブロック」全体の鉄鋼増産計画を実質的に統轄していたからである。⁽¹⁾本稿は76年10月27日に筆者が水津氏より満州産業開発に焦点を絞って聞き取り調査した内容を、同氏の夫人、水津アサ氏の御好意によって最近入手した若干の資料に依って補いながらまとめたものである。

昭和製鋼所関係者からの聞き取り調査についてはその後も続けているが、これまでのところ、水津氏の話の内容は、その見通しの広さと記憶の確かさで群を抜いている。それは1つには当該期に占めていた水津氏の社会的地位の特殊性に依っているのであるが、同時に、そればかりではなく、統計好きであった水津氏が事あるごとに自ら図表、統計表を作って事態の把握につとめ、また、後年、その体験を様々な形で記録に留めようとしてきたことにも依っている。

筆者の知る限りでも、水津氏は満州時代に関する記録として「鉄鋼業四十六年今昔ばな

(1) 水津利輔氏の略歴については松田芳郎「水津利輔氏と水津資料の特質」石川滋監修『日本・旧満州鉄鋼業資料解題目録——水津利輔氏旧蔵資料——』下、1980年2月、一橋大学経済研究所日本経済統計文献センター。

し」⁽²⁾「日本鉄鋼業の今昔物語」⁽³⁾「鉄鋼一代思い出話」⁽⁴⁾「鉄鋼界にかけた半生」⁽⁵⁾（鼎談）を残している。このうち前三者については主要な内容がほぼそのままの形で『鉄鋼一代今昔物語』⁽⁶⁾として一書にまとめられているので、一般の利用も容易である。今回の調査結果にも上記の諸論稿と内容の重複するところがあるが、それらの部分については一層具体的な指摘が見られることや話の進行上からあえて削除せずに残すことにした。

本稿の内容としては、特に、企業サイドにいた水津氏が官僚の物動指導を冷ややかに見ていた事実や、その根拠（例えば時に水津氏作成の資料がそのまま政府案になっていたこと）、増産計画具体化の際の政界の裏工作、中国人労働者の労働条件、八路軍の工作状況等；文字資料には表れにくい重要な問題が歴史的体験として語られている点が貴重であるといえよう。

ところで、本来、聞き取り調査結果の原稿化とその編集にあたっては、調査対象者自身による内容の確認と誤りの訂正を踏まえることが望ましい。しかし、残念なことに、水津利輔氏は1980年2月27日、齢86歳で亡くなられた。従って、その作業は水津氏の書き残された諸資料に頼って進めざるを得なかった。その結果、年代等で明らかに誤まりと判明するものについては筆者の手で修正を加えたが、なおかつ残った辻褃の合わない若干の部分については、本稿では印刷を見合わせた。その他、問題の些細さ故に削除した部分もある。文中の()内は筆者の補足である。

この内容確認の作業に際して、水津アサ氏より新たに故人の私信を含めた貴重な資料の提供を受けることができた。同氏からは事実の確認に関してもいくつかの御教示を得た。また、水津利輔氏の三女にあたられる宮崎幸江氏には、筆者と水津アサ氏との間での書簡

-
- (2) 水津利輔「鉄鋼業四十六年今昔ばなし」《1》—《8》、日本鉄鋼連盟『鉄鋼労務通信』899—864号、1963年8月1日—1963年11月28日。
- (3) 水津利輔「日本鉄鋼業の今昔物語」《1》—《12》、特殊鋼倶楽部『特殊鋼』12巻1号—13巻10号、1963年11月—1964年10月。
- (4) 水津利輔「鉄鋼一代思い出話」《1》—《35》、鉄鋼新聞社『鉄鋼新聞』1965年1月6日号—1965年3月3日号。
- (5) 水津利輔、畑昇、三浦豊彦「鉄鋼界にかけた半生、元日本鉄鋼連盟常務理事水津利輔氏に聞く」《1》—《3》、労働科学研究所『労働の科学』19巻9号—11号、1964年9—11月。
- (6) 水津利輔『鉄鋼一代今昔物語——日本鉄鋼業100年側面史——』鉄鋼短期大学出版部、1974年3月。

のやりとりに際して、代筆等の面で御手を煩わせた。今回の作業は両氏の御協力に負うところが大変大きい。なお、今回入手した資料は全て「水津資料」の一部として、一橋大学日本経済統計文献センター内に保管されている。

華北炭の利用について

水津 あなたにこれを返しますからね、読んで下さい。(事前に郵送してあった質問事項のこと)僕は手が震えるから字が読みにくいけれどね、そこはなんとか判読して下さい。順に説明していきますがね、赤字は水津回答書。ここで(昭和13年頃のこと)石炭に鞍山の需要急増に本溪湖、撫順炭の能力がまに合わず、後に通化炭、開遼炭も導入した。あなたが原料炭などで華北炭依存はうまくいったかどうかと書いているでしょう。石炭は始めには本溪湖と撫順炭に依った。それでスタートした。ところが昭和の鉄の増産が急に増えてね。そのために本溪湖と撫順の採炭能力には(限界があって、石炭)が足らなくなった。それで後にも中興炭とか開遼炭とか、えーそのあなたが言う華北炭に頼るようになった。それについては華北炭の方も開発能力があんまり進まないもんだから日本人の炭鉱師を派遣して応援してどんどん増産させて、それを鞍山に引き取るということが行われたんです。そんなことがそこに書いてあります。

松本 資料を見ますと通化炭とか開遼炭とか華北の石炭に対する需要というのは38年、昭和13年か14年という気がするのですが、そうですか？

水津 そうそう。

松本 その時には日本人の技師を派遣するわけですか、華北へ？

水津 そうそう。

松本 昭和からも行くのですか？

水津 昭和は自分自身鉱山技師を持っていたけれども炭鉱を中心としてはやっていませんからね。撫順などにおける技術屋を派遣したのです。

松本 そうすると満鉄関係の方を。

水津 ええ、満鉄関係から僕らの友人のこれ(華北の炭鉱)へ行って、それからそのまま死んだり、終戦になったりというのがたくさんあります。そういうことですね。

水津資料について

それから「年表の原資料はほとんど大学にあった『水津資料』です」⁽⁷⁾…これはこの通りです。僕は資料を家に持って帰ると保存に厄介だから、全部あげて、書類箱戸棚2つだけトラックで持って帰ってもらったんですよ。家にはあまり持ってなかったんです。それで僕の手元に非常に資料が少ないんです。

松本 石川滋先生がですね。

水津 え？

松本 僕が水津さんに会うと言ったら、整理が進んでいるからよろしくお伝え下さいということでした。

水津 あー、その差し上げた先生が誰だったか僕忘れてしまって。ええ、先生がやっぱりあなたと同じように何かレポートを書きたいというので。僕が鉄鋼連盟の常務理事をしておった時です。そこへ訪ねてこられたんです。それで色々何回か会って話をしたことがあるんですが、それが縁故になってね。最後に資料を誰かにやるかそうでなかったら棄ててしまうか、それで考えてこれは大学が良いだろうというんで（一橋大学にあげた。）それから後に僕に電話がかかって、資料がたくさんあるんで、整理に一つ遊び方々来てくれないかという話があったんですけど、その時はもう鉄鋼連盟は辞めて遊んでましたけどね。もう70以上も年をとってましたからね。整理をようやるだけの気力がないんで断わって、整理がめんどうなら棄てて下さいと断ったんです。

増産計画の立案について

それからね、今度は立案過程に関してだろう。「第5期計画の着手はいつでしょう」とあるね。これは昭和14年の5月です。それから昭和製鋼所の発足（五期計画に関して）について「内地の了解は昭和15年2月ですが」となっているでしょう。つまり14年の5月に満州で立案してそれを今度内地へ日本政府の了解を取りに行かねばならない。だから昭和14年のその翌年の2月ごろですよ。内地はこれは後にも書いておいたけれど1ヶ所じゃないんですよ。方々日本政府へ行行って僕が了解を求めねばならなかったんですけど。

松本 商工省とか企画院とか。

(7) 事前の質問書に付した筆者作成の五ヶ年計画、昭和の増産計画に関する年表のこと。

水津 ええ。行かないところはね文部省と司法省だけ、あとは10省くらい（まわった。）それからあなたが書いている対満事務局とか満州関係を管理する立場にあったもの、その方はいつでもOKなんですよ。「他の方は？大蔵省とか商工省は承知しましたか？」というふうにそれを条件にするんですよ。ですから仕方なく僕は全部まわらなければならない。行かないところは2省だけ。文部省と司法省だけ。

松本 文部省、司法省以外は全部行ったんですか？

水津 ええ、だから骨がおれて苦労したんですよ。それから何ヶ月も滞在して、一番長い時は6ヶ月も滞在した。1ヶ所1省の了解をとるにしてもはじめからその大臣に会う訳にはいかないでしょう。係長に会って、それである程度了解したら今度は課長に会ってくれ、課長が了解したら部長に会って下さい、局長に会って下さい、ということになるんですよ。だからもう大変なんです。それから社長と一詣に行くでしょう。社長は大臣に会う。また大臣に会って社長と僕と一詣になってよく大臣と会う。そうすると大臣の方から君達ももう局長の了解を得たかってなことで。ですから4～5人の人にその人の都合の時に往ってくるんだから1省済ますのに何日もかかる。まあ一つ苦労したのはそこです。

松本 一番苦労したのは昭和15年のはじめでしょうか？（14年度物動は、この時期、春以来の天候異変と秋以降の欧州大戦の勃発によって破綻が明瞭になっていた。）

水津 後で言いますけどね、一番困ったのはそれより少し前の時です。

松本 あの日満支経済協議会というやつですか？14年の10月にありますね？

水津 日満支協議会というのはね、あれは名前は大きいけれど政府の、政府同士の、役人同士で僕は直接入ってませんから。だから日満支経済協議会に関しては、僕はあんまりはっきりした記憶がない。

松本 これがその資料なんです。（同協議会関連資料のコピーを示す。）泉山仙六さんという方がいましたね、商工大臣だった。あの方が残した資料なんですけれども。小日山さん、理事長が出席されているようですね。満州関係の特殊会社としてはあとは東辺道と…。

水津 だからこれは僕は深入りしてないんです。それでこんなのは形式的なものでね。僕からみれば形式的なもので実質的なものとしては重視していない。まあ、役人の暇つぶしにどうとなりおやり、…我々はこういう考えです。

松本 そうするとこの会議をやる前にもっと下のレベルで実際は決っている？

水津 ああ、そうそう。

松本 伍堂（卓雄）さんが鉄鋼増産計画を作りますね。一番最初に小川（郷太郎）商工大

臣が作って、で伍堂さんが作って、それから吉野（信次）さんが作るんですね。伍堂さんが作った計画というのはこれ（昭和製鋼所の増産計画のこと）と対応しているんですか、大体？

水津 ええ、大体そんなふうに対応していると自分は思って…。大体その伍堂さんが書いたという案は、その原稿というのは僕が作ったのを伍堂さんの判で書きなおしたんです。だから伍堂計画というのをやらなくてもそれまで昭和が考えておったのをやりさえすりゃあいいんだから、僕ら悪口も言わんし、だまって笑って見とったんです。

松本 ああそうなんですか。

水津 だけどそれはここ（筆者への返信）に書いたように大事だけど実現しない。それと伍堂さん自身もあんまりそれをグングン押していくという熱もなかった。商工大臣になったという、元昭和製鋼所社長で商工大臣になったという名誉欲から発表したくなるが、実際に実施する能力もないんだから。

松本 あー、この調査（日満現地調査団）の結果というのはわかりますか？

水津 これはね僕はどうしても思い出せないんです。誰が来てどういう何をやったか。日満現地調査団、これがね僕には疑問です。

松本 水津さんが昭和21年だったと思いますけれど、国民経済研究協会で講演をされてますね。

水津 そうですか？

松本 そこに（講演の記録に）康德6年（1939年）の7月と8月に数十名を越える大調査団が来たと書いてあるんです。

水津 そうですか？それは僕の記憶にない。

松本 水津さんが自分で御書きになったのではなく講演されたのを別な方が書いたんでしよう。これ「満州鉄鋼開発5ヶ年計画を繞る諸事相⁽⁸⁾」です。

水津 それはそうかも知れん。僕はもう忘れてしまった。

松本 わかりました。

水津 あの頃日満計画、日満の間は非常に密接にこうたくさんの人が行き来してましたか

(8) 水津利輔「満州鉄鋼開発五ヶ年計画を繞る諸事相」水津利輔『第1次満州産業開発5年計画の基本的理念、計画書及其の実施成果について』国民経済研究協会、金属工業調査会、1946年8月所収。

ら。もう詳しいことは忘れてしまった。

松本 さっきの伍堂案のことを御聞きしたいんですけども、伍堂案というのは「内地」を含めた計画ですね？

水津 そうです。

松本 昭和製鋼所はそうした「内地」の生産目標も考えていたんでしょうか？

水津 それはそうです。「内地」はこうこう、「満州」はこうこう、それで日満はこうと。日満両国がお互いに相侵さないで助けあっていこうというのが日満計画ですから。

松本 それで、昭和で作ったものを伍堂さんが持って行っちゃったんですか？

水津 はははは。それは僕が作ったのを社長時代にみんな持っている。それであの人は非常に勉強家でね、いつも大きなこんな（手を広げて見せる）書類カバンを持って関係書類をつめて持って歩く人だったんです。それだからカバン持ちの執事は大変だったんです。はははは。だから昭和時代の書類を全部持って、持ったまま商工大臣になって、翌日からもう俺は社長じゃないぞって、はははは、僕は（伍堂さんに）ついておきながら朝起きてみたら（商相就任が）新聞にのっている。それからすぐホテルへ行って、じゃなかった私宅へお祝いに行って、もう今日から俺は社長じゃないんだって、…そんな調子だから書類をぜーんぶ商工大臣が持っている。それを今度は大臣の名前で焼きなおしちゃった。⁽⁹⁾

松本 なるほどね。

水津 「この辺の事情をうかがいます」てなってるね。『満州国政府が日満支協議会に提出した『鉄鋼』の表紙には、「新鉄鋼計画トシテ日満支経済会議ニ提出セルモ説明ニ止メ未審議⁽¹⁰⁾」となっている』でしょう。ここで全増産計画の進行中止、全部の計画の進行を中止したんですよ。このころに（昭和14年9月）。

松本 昭和の場合ですと7期計画と言われるやつですね。

(9) 伍堂卓雄の商相就任は全く突然のできごとであった。この時彼は、たまたま昭和の増産計画申請のため日本に戻っていた。林内閣成立時の政局、人事の混乱については江口圭一「林内閣」（林茂、辻清明編『日本内閣史録』第13巻、第一法規出版、1981年8月）を参照。

(10) 「満州国」政府『鉄鋼』（1939年10月）の表紙にある水津氏の書き込みを抜き書きして、質問状に入れてあった。（石川滋監修『日本・旧満州鉄鋼業資料解題目録——水津利輔氏旧蔵資料——』上、1979年3月、一橋大学経済研究所・日本経済統計文献センター、167ページ。）

水津 いや5・6期計画。

松本 あ、5・6期計画も中止になっちゃうんですか？

水津 ええ、「中止」になったんです。昭和14年の9月に欧州大戦争が勃発しました。

松本 はい。

水津 16年の12月には大太平洋戦争が勃発した。それから「満州」…そういうことがあったためにあの日満経済（協議会）計画提案案も説明はあったけれど、進展もしないし、計画そのものが「中止」になっちゃった。それからもう一つ、ここに「満州案は権威なし」と書いてある。（松本の手紙の理想案に関する質問についての水津氏の書き込み回答のこと）権威は疑問であると言っている。

松本 昭和製鋼所はこの理想案というのとはできると思っていたんですか？

水津 そんなものできるとは思っていない。だから役人の案だと。僕は日満支経済協議会だとかそれから伍堂さんの案とかいうものは信頼していない。そんなものは役人の暇つぶしにやるのがいいですよ。実際にやったことのない人達の考えてることなんて問題にならない。まあ役人は役人でやったらいいだろうと、そういう考えです。

松本 そうすると「理想案」というのは関東軍あたりが中心ですか？

水津 軍人等の理想案ですよ。だから全部案はできたけれども全増産計画の進行が「中止」になった、このように。

それから「康徳7年夏頃日本側ノ立案ノ後ニ協議スルコトトナル 水津⁽¹¹⁾」と書いたのはね（日満支経済協議会における満州国側の説明についての取り扱いのこと）ある程度（中止の決定を）伸ばそうと、そういうことです。

松本 この日満支経済協議会の時にも5期計画はゆき詰まるんですか？

水津 それはそうです。簡単には進まない訳なんですわ。

対日交渉について

「満州側の主張を通すためにどのような苦労があったのか？」その苦労はね、この第5期計画のこの時よりも昭和8年の2期計画の時のの方が骨が折れた。

その時には6ヶ月も東京に滞在した。伍堂社長、社長は伍堂さん、僕と二人で来た、そ

(11) 同上。

れで高橋是清が大蔵大臣の時。

松本 ああ、緊縮する訳ですね。

水津 ええ、拓務大臣は永井（柳太郎）だった。それで僕は商工省やら大蔵省やら行って下の方の主任や課長に会って説明する訳ですね。しかし、結局、大臣がいいと言わなければいけないだから大臣に会おうとすればこちらは伍堂社長が会う。それでいつ行っても行ってもまだ都合がつかません、都合がつかません。何日かかっても社長の面会の日程が決まらないんです。そしたらこれは書面にも書いてないんだけどね、何とかいう男が突然と僕を、僕はあの赤坂の山王ホテルになっている、その時は何とかいうホテルに泊まっていた、その時にそこへひょこっと訪ねて来て、「あんた方またずい分と伍堂さんと二人で長い間苦勞されているが何を苦勞されていますか？」とこう言うんですね。実はこうこうで大臣とうちの社長が会う日程がどうしても決まらないう（言う）と、そうしたらね、その人が羽織袴でホテルにやってきて、「そうですね、それなら私が話してあげましょう」、「すぐ会えるようにしてあげますから、〈明日だったか明後日だったか〉大蔵大臣の秘書官室の廊下で会いましょう」と。それから僕はびっくりしちゃってね。どういうスパイかと思って、本当スパイかと思っちゃってびっくりしちゃってね。…それから大蔵大臣の秘書官室の入口で待ってたんです。そしたらやっぱり羽織袴でやってきて、「今から大臣秘書に会います。大体大臣の了解を取ってきました」、てこう言うんです。それから秘書官というの大きな部屋を持っていた、（それが）すぐに、「あいいです、いいです。もう大臣も了解したからあなたの社長に大臣が会うよう手配しました。それから案の内容は一切原案通り文句はありません。心配しなさんな。」「僕にもその案を一部くれ」（て言うんです）（それで）またこんな大きな計画のつつみをその秘書官に渡したんです。それから「大事な部分は僕がもらって行きます」って。はっはっは。「内容は一切変えんでよろしい、その案でよろしい」そういう訳です。はっはっ。たった10分か15分で大蔵大臣の了承を実質的に得たことになる。それから拓務省へ行って「大蔵大臣の承認を得ました」って大声で言ったんです。このごろ「ロッキード事件」が不思議なものだったということがわかってきましたが、そのころから実際政界というのは不思議なところだったですよ。

松本 じゃあ、6ヶ月も苦勞したのが10分で片づいたんですか？

水津 あっはっはっ、そーう、そーう。それからね。それからがおもしろいんだ。大喜びして僕が鞍山に帰ったでしょう。いよいよ着手してよろしい、てんで工事を進めていた。そしたらまたしばらくして拓務大臣の紹介状を持ってね、満鉄商社に面会人が来たんだ。

それがまたいずれ今度は満鉄総裁と拓務大臣の紹介を持って昭和製鋼所の社長に会いに行くと言うんですという情報が入ってきた。しかし、誰かと思うとあの東京でやってくれた男なんですね。それから僕はびっくりしちゃっていよいよ日本の政界というのは素人には分らない、どこがツボか、またどこが表か裏かがね。こんな不穩行なことをしているとそれからまあ（その男が）鞍山にやってきたんです。そしたらね、その日本のその時一番勢力あったのはね、荒井か、荒井じやない、総理大臣じやない、陸軍大将の…。

松本 荒木？

水津 荒木という陸軍大将がいるでしょう。あの人の奥さんの兄さんという人が紹介してきてね、それが私の会社の顧問ですっていうんです。満鉄と鞍山の昭和製鋼所に住宅会社を作るっていうんです。貸住宅会社を作るっていうんです。満鉄と作ったものは全部満鉄と昭和製鋼所に貸す、そういう会社を作るっていう大体の了解を得てきたから昭和製鋼所も承知してくれて僕に言うんですよ。僕はもうびっくりしちゃってね。いよいよ曲者と思ったがもう断れないんですよ。世話になっているから。拓務大臣、満鉄総裁で上の方を全部固めてくるでしょう。日本「内地」にも陸軍大臣の荒木大将の奥さんまで摺まえてくるでしょう。権威の…もういやと言えないんです。仕方ないんで泣きながら、そのどんなやつでも作んなさいというんですぐ鞍山にその会社を作ったんです。満州住宅会社での作ってね。大連と鞍山にどんどんレンガ建ての住宅を建てた。実際、政界というのは昔から恐いところ(12)。そういう点は私は深い印象があるものだから…。話す時間がかかるから先にこっちに入りましょう。6ヶ月もかかった。その次だ。「商工省、大蔵省とはどんな交渉がありましたのですか？昭和が6期計画を締めたのはいつでしょうか？」この昭和が6期計画を締めたのはね、昭和16年の4月です。正式に締めたのは、鉄鋼、あー日本には鉄鋼統制会でののができたんです。昭和16年12月に第2次世界大戦が勃発したんです。それからそういうような「内地」と世界情勢が全く変って来た。製鉄所を作るっていうことに資材とか人力とかいうのがまわらないんです。世界戦争だから。そういうことになったから6期計画5期計画は全面的に中止した。16年の12月に世界戦争勃発の時に中止になった。ええもう、第4期計画（と）5期計画のほんの一部がやられたけれど、5期計画はまるでもう全然。

(12) この時羽織袴で現れた怪人物は、後にアラビア石油会社の社長として活躍する山下太郎氏であった。前掲『鉄鋼一代今昔物語』113、231ページ以下参照。

松本 ちょっと逆のぼるんですが、この交渉の時に一番大変だったのは商工省ですか？大蔵省ですか？

水津 商工省と大蔵省。うん。拓務省はそれ程困難じゃあなかった。それから商工省は日本の担当者ですからね、日本鉄鋼業との関係やらをどうなっているかと取り上げ方が非常に熱心だった。それから大蔵省はやっぱり金のことと全体のこと、日本の政治全体のことを心配して、その2つが一番大変だった。それとやかましくいうのは陸海軍。

松本 特に海軍でしょうね？ 陸軍はわりと「満州」に味方する…。

水津 もう海軍が一番熱を持っていた。昭和に関して、昭和に対して心からの熱を持ってじわじわとやってきたのは海軍ですよ。

陸軍はね、陸軍幹部は同じように力を入れるけれど、本当に技術的・専門的に力を入れたのは海軍。どっちかといえば海軍はもう専門的に専門家が派遣されてね。初めの伍堂さんも海軍中将だから。技術屋ですよ。

松本 そうですか。陸軍は意外と冷たかったんですか？

水津 いや冷たいことはない。大ざっぱには強いけれど内容に関して専門的なのは海軍でしょう。海軍は例えば分析でも鉄分はどういう鉄分をつめて欲しいとか、どういう寸法のものが欲しいとか、軍艦のボイラー用のチューブは全部昭和製鋼所に作らす、ていうようなことを非常に具体的な計画を。

松本 実務能力がある訳ですか？

水津 陸軍の方はただ全体で何ぼ位作ってくれうだけで、どういう成分のものをどれだけ作ってくれというようなことはない。……腹が太いっていいますが、寛大なところがあったですね、海軍は。猪突孟進的に行動したのは陸軍だったんです。そういう陸海軍の差がはっきりありました。私は見てるんです。海軍の方が合理的でねばりがあった。度量があった。

物動計画での申請の水増しについて

申請の時に水増ししておったんじゃないかというんでしょう？ そうじゃあないんですね。日本は昭和12年7月支那事変の勃発以来不景気が始まり、経済統制が始まった。「満州」側も同様に不況期なので資材、人員等の割当は当然申請よりも減る。水増ししておったから減ったんだろうと、そんなことではないと私は思う。やろうにもやれない。

松本 ただあんまり低すぎるんで（申請数に対する割当ての率が）。どこも足りないのは確かなんですけど、あちこちで技術者の取り合いがあったんじゃないかと思うんですよね。

労働条件について

水津 それから「労働者は毎日何時間位働いていたのでしょうか？」…事務系で8時間、技術系で10時間。

松本 これは日本人の場合ですね？

水津 いえ、日本人も「満人」も同じです。技術系は10時間勤務だけれど実働は12時間位です。我々はやったんです。12時間2交代で。

松本 会社の資料に月当りの働くべき時間というのが出てるんです。10時間として計算されているんですか？ 実際は12時間だけれども。

水津 熔鉱炉とか骸炭炉とか昼夜作業してるんですから、昼夜交代のところは12時間勤務です。しかし、基本的には10時間で2時間残業という2時間割増をもらっとった。それが事務の方は全部実務8時間、そこで技術系と事務系との間に非常に開きがあるでしょう。それが非常に不平のもととなって、それをうまくするために今度僕は労務係へ行つた。後には現場の労務の監督も2年程やってね。こういうふうにならぬと不平がたくさん出るし、それから不況になるし、事業計画が非常に難かしくなってくる、それと労働組合運動というのが出てきて。

松本 日本の本国でですか？

水津 そうそう。日本の本国で労働運動が非常に難かしくなってくる。⁽¹³⁾

松本 昭和製鋼所の労務係になったのはいつごろですか？

水津 鞍山に帰ったのが大正8年ですから大正11年か12年です。大正から昭和のはじめにかけてぐらいですね。僕は12年から13年に労務に行つて、まず手始めに勤務時間の不正を直したことがあります。それでずい分困つたけれどね。夜の外出も親切なる友人から止

(13) 「満州」においても1918年を転機として同盟罷業が増えつつあった。奉天軍閥が軍事費捻出をねらって行っていた紙幣の乱発によって奉天票が暴落し、労働者の生活条件が悪化しつつあったことと、中国本土、特に、上海、青島地域での労働運動の高まりが、在満労働者の覚醒を促していたことがその主要な背景であった。そして、そうした状況は当然日本人企業家達にも強く意識されていたものと思われる。(関東軍参謀本部『満州ニ於ケル労働問題』1925年4月、参照。)

められる位だった。

松本 危ないから？

水津 危ないから。ねらわれている。一方を良くしてやりゃ一方は反対でうらむんだ。水津のやつがこんなことやり出したって。非常に苦勞した。辛かった記憶があります。⁽¹⁴⁾

松本 日中戦争の頃、昭和12年・13年位は何時間位働いていたんですか？

水津 それからすぐ後改正したから全部8時間だった。

松本 全部？ 技術者も事務も？

水津 そう。熔鉱炉の方はそれまで2交代でやとつたのを3交代に替えた。3交代に替えて全部8時間にした。事務と技術屋と同じ時間にした。「満人」で最初に3交代に替えたのは僕ですよ。昭和が……。

把头制，賃金について

水津 それから「中国人には把头制があったか？」ていうんですね。無しです。

松本 把头制は無しですか？

水津 無しです。⁽¹⁵⁾日本は全部指揮監督してたです。それから、従業員は日本人1人に対して満人6人の割合。⁽¹⁶⁾

松本 大体設定したんですか？

水津 この割合も僕が決めた。それと「満州人」は働くことは働くけれど「パート」でなくて、日本人が「パート」の資格で「満州人」を指揮監督しながら自分も働くというかつこうで。

松本 昭和製鋼所は工場と鉄鉱山と両方持っていますね。今のは工場のお話ですか？

(14) 前掲『鉄鋼一代今昔物語』59ページ以下、前掲「鉄鋼界にかけた半生」《2》『労働の科学』19巻10号、53ページ参照。太平洋戦争期には労働時間の再延長がはかられたものと思われるが、確認していない。

(15) 水津氏の話は一般工場労働者を念頭においてなされていた。水津氏の後を継いで昭和16年に昭和製鋼所企画課長となった福永源夫氏によれば、鉱山労働や工場周辺の運搬作業に従事する中国人労働者の間には、ロートル（老頭兒）とよばれる統轄者が居り、20人位の単位で彼らを指揮していたという。1980年3月の筆者の聞き取りによる。

(16) 別の機会に筆者が紹介した1対3という比率は、単純な引用の誤りであったので、この機会に訂正しておく。拙稿「満州鉄鋼業と日本の総力戦体制（I）」『岡山大学経済学会雑誌』13巻2号、1981年8月、96ページ。

水津 ええ。鉱山は（中国人が）もう少し多い。倍ぐらいになった。（1対12の意か？）

松本 水津さんは工場関係ですか？

水津 工場関係です。後には、終戦の直前には鉱山の方の労務関係もしました。それでどうして日本人1に対して「満州人」6かというのと、これは給料からきてるんです。給料が日本人1人分を「満州人」を6人やとえた。それ以上日本人を増やすと…。

松本 経費節約と？

水津 そうね。給料が高いのが増えると人件費が増える。だから日本人は中国人の6対1以上に増やしてはならないって僕は触れを出したんだ。確かこれはどっかに記録がありますけれどね、日給でいうと日本人は3円位だったですね。それから「支那人」が60銭位。

八路軍の工作について

それから、「中国人労働者に対する八路軍の工作もあったようですが、それはいつですか？」っていうんですね。これははっきりと覚えていませんが、確か昭和17年頃じゃなかったかと思ってます。「反乱」が起ったんです。⁽¹⁷⁾

松本 工場で反乱があったんですか？

水津 ええ。工作のやり方は一部は秘密工作だったんです。はじめのころは秘密工作で「満州人」を寄宿へ訪ねて口説いていったんです。サボらせたんですね。後には陽動的になって労働者を、幹部を引っぱり出した。だけどその他の場合は「満州人」は非常に従順でありまして、反抗的なことはほとんどなかったです。

松本 争議なんかはなかったんですか？

水津 なかったです。一切なかった。余りにぶんなぐっても反抗しないというように従順だった。

松本 そういう工作を受けた人はどういう態度をとったのですか？

水津 もう絶対力ですからね。八路軍でいうのはのぞんできたなら反抗できないんです。むこうに言われる通り、サボレと言われればサボルし、ついて来いと言えばだまってついでに行く。それほど従順なんですね。日本人に対しても従順だけれども、八路軍に対しても従順だった。その絶対従順というところが「満州人」の、「支那人」の特徴でしょうね。

(17) 前掲『鉄鋼一代今昔物語』178ページ参照。

松本　すると、やめろって言われてやめて行った人が多いんですか、それともサボったりした人が多いんですか。

水津　それはサボタージュの方が多いですよ。やめていったのはそんなにたくさんはいない。

華北労働者の募集について

松本　それからお聞きしたいんですが、華北から大分労働者が来てますね。それはどういうふうにして集めてくるんですか？ 鞍山統制委員会というのができますね？

水津　あれははじめのころは、大正時代ごろは、何も募集しなくてもどんどん移住者として、満州ブームだからいっぱいになるほど「満州」に来たのです。鞍山に来たり北満の開拓に来たり。それが後に今度は戦争が始まるようになってそういう人が少なくなって。それから日本人の労務係を「満州」と「支那」本土との境、何とといったかな、あの事変を起こした……

松本　蘆溝橋のあたりですか？

水津　あの辺でいいのかな？ 国境へね(それと?)北満の国境へね労務事務所出張所を置いてね、2人ほどやった。

松本　昭和製鋼所も出したんですか？

水津　ええ。昭和製鋼所も日本人をね、昭和製鋼所労務係出張所というのを作った。

松本　北京の近くですか？

水津　北京まで入ると中国ですからね。東三省、「満州」と本土中国との境に。最初、なにか「満州事変」が起ったところ。

松本　「満州事変」が起ったところですか。じゃあ柳条溝。

水津　うん、柳条溝。東三省と関東州との境い目、炭坑があった古い町です。あとで調べて下さい。日本は「満州国」には勢力を持ってたんだけど「支那」本土に対しては勢力ないからね。だから出張所は満州国の一番はじの国境の町に作ったんです。⁽¹⁸⁾

それからその次に平衡資金について書いてあるでしょう。これは僕はどうしても思い出せないんです。平衡資金というこの言葉も思い出せないんです。

(18) 昭和製鋼所の労働者募集事務所は、少なくとも天津にはあったことを確認できる。前掲「満州鉄鋼業と日本の総力戦体制(Ⅰ)」92ページ参照。

松本 僕が資料を見たところですね、「満州国」でも日本でも統制価格というのがありますね、それで、「満州国」の方が鉄鋼統制価格が高いんですね。だから銑鉄を日本へ輸出した時に統制価格では利潤が得られない。だから昭和製鋼所の銑鉄を輸出する時に…⁽¹⁹⁾

水津 補助金だね。…日本では製鉄奨励金と言ったんです。「内地」ではね。はじめは銑鉄1トン生産するにつき1円くれたです。それが今度は僕が統制会で理事になってから値上げ運動をやってね、2円にしろって。そして製鉄奨励法の改正をやったことがあるんです。あれが「満州」でいやあ平衡資金だったんだなあ。この辺はあなたの創作にまかすわ。僕はわかりません。記憶にない。⁽²⁰⁾

(国鉄中央線三鷹駅前、レストラン“ジン・ジン”にて)

(19) 満州鉄鋼統制価格制度の概略については前掲拙稿「満州鉄鋼業と日本の総力戦体制 (I)」111ページ以下参照。

(20) この後テープを止めてから、若干の興味深い話が聞かれた。その1つに、本国鉄鋼企業の「満州」進出に際しては、昭和製鋼所が申請をチェックし、実質的に許可を与えていたというものがあつた。

なお、本稿のテーマに関連して、昭和56年度文部省科学研究費補助金〔奨励研究(A) 課題番号56730025〕の助成を受けた。